

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 丸川 哲史

論文題目 台湾における二・二八事件前／後の文学空間
——脱植民地期化と祖国化の交錯する磁場——

論文審査委員 松永 正義教授、鵜飼 哲教授、岩月 純一准教授

1 本論文の構成

本論文は1945年から1950年前後までの台湾の文学の分析を通じて、日本の敗戦後、冷戦＝内線構造の確立に到る以前の、いわば可塑性に満ちた時期の台湾の様相を叙述し、そこに中国と台湾とが交錯する、前後の時期とは異なったありようを見だし、台湾における脱植民地化の過程の特異性と、複雑な様相を分析しようとするものである。

本論文は次の各章から構成される。

序章 一九四〇年代後半台湾への注目

- ・ 脱冷戦とグローバル化の現在
- ・ アジア冷戦の起源としてのポスト植民地状況
- ・ 四〇年代後半における台湾の文化概況
- ・ 記憶の取り戻しとその磁場
- ・ 各章の構成と先行研究の整理

第一章 光復後の文化空間——楊逵を中心として——

- ・ 前提
- ・ 光復直後の台湾の文化状況
- ・ 二・二八事件までの楊逵の活動
- ・ 楊逵と「橋」副刊、そして四・六事件（「和平宣言」）
- ・ まとめに代えて

第二章 光復後の脱植民地化と「省籍」問題——文学作品の表象分析を中心にして——

- ・ 前提
- ・ 光復初期の祖国イメージとその変遷
- ・ 日本統治時代の整理とその作品化
- ・ 「日本」というトラウマの転移
- ・ 諷刺、あるいは「日本」という尺度
- ・ ポスト植民地期における「女性」の表象
- ・ 呂赫若における「女性」のポジション
- ・ 結びに代えて

第三章 二. 二八事件以後の「沈黙」の意味——『国声報』「南光」副刊を中心に——

- ・ 前提
- ・ 「沈黙」の意味の広がり
- ・ 『国声報』「南光」副刊について
- ・ 「南光」副刊の持つ両義性
- ・ 抗戦文化と台湾
- ・ まとめに代えて

第四章 二. 二八事件後の新文学論争——『新生報』「橋」副刊の論争が示したもの——

- ・ 前提
- ・ 『新生報』「橋」副刊の位置
- ・ 言語の切り替え、および「方言」をめぐる
- ・ 台湾における脱植民地化の特色
- ・ 「橋」副刊上の小説作品（黄昆彬「雨傘」をめぐる論議を中心に）
- ・ 雷石楡「女人」をめぐる論争
- ・ まとめに代えて

結論及び今後の展望

2 本論文の概要

本論文が扱うのは、日本の敗戦後、冷戦＝内戦体制が確立するまでの過渡的な時期であり、また台湾がその近代詩の中では珍しく、大陸中国と共通の枠組みの中に置かれていた時期である。また中国自身もこの時期には近代国家体制の形成期にあった。それ故この時期の台湾には後には失われた多くの可塑性＝可能性がはらまれていた。またこの時期は日本の支配からの「脱植民地化」の契機と、中国への復帰による「祖国化」の契機とが交錯する時期でもあった。にもかかわらずこの時期は二. 二八事件以後の弾圧と、台湾という主体の形成という視角からのみ語られがちであった。本論文はこうした視角を批判しつつ、二. 二八事件後の批判的議論の存在と、そこにみられた大陸の進歩的知識人と台湾の知識人の合作を、内在的に検証し、「脱植民地化」と「祖国化」の二つの契機の交錯の中にみられる問題を整理、解明しようとするものである。

序章では、本論文全体の見取り図として、日本の旧植民地の脱植民地化の過程が、それぞれの地域固有の地政的条件に規定された冷戦構造の圧力によって挫折させられていくプロセスへの注視が必要であること、台湾の場合には脱植民地化の主体形成が、「奴隷化論」によって阻まれ、それ故脱植民地化が外から与えられた「中国」への同一化にすり替えられていったこと、にもかかわらず二. 二八事件以後も、四. 六事件に象徴される動きのなかで、大陸の進歩的知識人と台湾知識人の合作によって、上述のような構造を解消しようとする方向が見られたこと、などが述べられる。本論文はこうした動きの実態を解明しつつ、そこにみられる問題構造のありようを分析しようとするものである。

第一章では、楊逵の戦後、とりわけ二・二八事件以後の活動を跡づけ、楊逵が大陸の進歩的知識人との提携を深めつつ、他方台湾の文学青年たちを指導し、彼らを進歩的知識人たちと結びつけていったことが述べられる。これらの文学青年たちの動きは、四・六事件に到る動きと重なるものであり、そうした楊逵の動きは、日本語欄の廃止と共に筆を折っていった作家たちとの対比に於いて、ひとつの典型と見なすべきだと、丸川氏は考える。

第二章では、まず戦後直後の「祖国」イメージについて、今日台湾人の「祖国」への失望を象徴するものとして典型化されているいくつかの語りを、当時にあっては必ずしもそうした方向にのみ収斂されぬ多様な見方が存在したこと、むしろその後の国民党支配の中でそうしたイメージが神話化されていったことが、当時の資料の分析によって示される。

また当時の小説の中に、虐げられた「女性」のイメージが台湾の運命に重ね合わされる構造を持つものが、類型として存在することを指摘し、そこでは日本時代の総括が、「犯す男性」（日本人男性）／「犯される女性」（台湾人女性）／「去勢された男性」（台湾人男性）といった寓意の中にとらえられていること、やがてこの日本人男性が、外省人男性に置き換えられていくことは、日本の植民地支配が、戦後過程の中でトラウマからノスタルジーへ書き換えられていく過程とパラレルであることが示される。さらに、こうした「女性」イメージと異なる「女性」の形象化として、都市下層の女性をリアリズムの手法で描いた呂赫若の例が対置される。

第三章では、二・二八事件以後の時期を取りあげ、弾圧後の「沈黙」を打ち破ろうとする試みが、さまざまな形でなされており、完全な「沈黙」の時期ではなかったことが叙述される。またそうした動きのなかで、大陸の進歩派の占める意味は大きく、彼らは抗日戦中の抵抗文化を台湾にもたらそうとしていたことが、国民党の機関紙でありながら進歩派の抗日文化を紹介するメディアでありつづけた『国声報』の「南光」副刊を例として述べられる。だがこうした進歩派の「抗日」は、国民党の名分としての「抗日」と同じものとして、台湾の知識人に感じられる事情もあり、両者の合作にはさまざまな調整が必要だっただろうと指摘される。

第四章では、『新生報』の「橋」副刊を取りあげ、ここに大陸の進歩的知識人と台湾知識人の合作により、批判的な言論を発展させようとする場が成立していたことを述べ、また中での文学論争の分析を通じて、両者には大きな認識の隔たりがあり、その隔たりを生みだした大きな問題は、日本統治の影をどう処理するかというアポリアであったと指摘される。大陸の知識人は「抗日」経験の中から日本イメージを作っているため、台湾の固有の文脈をなかなか理解できず、また台湾知識人の側からすれば、大陸における多様な抗日経験を総体として理解する条件に欠けていたからである。そしてこうした隔たりを調整するいとまもなく、四・六事件から白色テロへと時代は突き進んでいった。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、二・二八事件のみに焦点化させがちであったこれまでの見方を排し、陳映真、曾建民、藍博洲、横地剛などによる研究の成果を取り入れ、二・二八事件以後、

四．六事件、白色テロに到るまでの時期の、左派知識人の動向を、当時の資料に即して叙述することに成功している点である。これまで個別事例の叙述はあるが、こうした通事的な叙述の試みはあまりなされてきていないだけに、本論文の試みは貴重である。

第二に、当時の資料によりつつ「脱植民地化」と「祖国化」、「奴隷化論」といったさまざまな方向性が、当時の個別の論争や文学的形象の中に、どのような問題構造として現れているのかを、見事に解明したことである。第二章の、「祖国」イメージの神話化をめぐる分析、小説中の「女性」イメージの分析を通じて、日本イメージがトラウマからノスタルジーへと変容していくとする指摘、第四章の、大陸の知識人と台湾の知識人が、その日本観を軸として隔たっていくとする分析などは、説得的なものであり、本論文の最大の成果であると思われる。

第三に、冷戦後の東アジアの問題を、脱植民地化から冷戦構造の確立に到るプロセスの再検討の中で考えることは、丸川氏のみならず多くの論者によって試みられているが、そうした試みの中に台湾が取り入れられることは少ない。台湾の固有の歴史的な文脈を、うまく組みこむことができないからである。丸川氏のこの論文は、そうした状況に対して台湾の側から架橋しようとするものであり、そこにも本論文の意義があるものと思われる。

だが本論文にも瑕疵がないわけではなく、第一に、本論文は全体として叙述を急ぎすぎているところがあり、時として不用意な表現が見られる。8頁での、「内戦の影響を受けており」といった叙述、12頁で、彭瑞金論文に、初出(『文学界』)に拠らずに触れている点、などはその一端である。

第二に、本論文の目的は、左派知識人の動向をまとめた形で叙述することであり、それには成功しているものの、叙述が存在証明の域に留まっている部分があり、台湾のこの時期にのみ見られるさまざまな方向性、可能性が、それ以前の植民地支配、あるいは抗日戦のどのような脈絡の中で形成され、どのような意味を持つものであるのかといった問題、あるいはこうした知識人たちの動向が、全体の政治、社会の中でどのような位置にあるものだったのかという問題など、さらに踏みこんだ分析が期待されるところがある。

そもそも本書に叙述された文学面での交流の存在だけをもって当時の台湾が「祖国化」していたとする評価については、本論文も「台湾文学」という場の存在を前提にしている以上、「中国文学」内部の複数性、多様性全体についての検討と評価を欠いたままで断定することには慎重さが求められよう。また台湾の「再植民地化」というこれまでの歴史観に対する反論としても、見過ごされてきた新論点の提示にはなっているものの、政治史と文学という焦点の違いを考慮すれば、なおいっそうの議論の余地は残るであろう。また、あり得た「祖国化」の可能性が国府の台湾移転と白色テロによって失われたというモチーフは、大陸と台湾の双方で起こった粛清の並行性を指摘する上では重要な観点であるが、「あり得た可能性」そのものについてはより十分な吟味が必要であろう。たとえば本論文も指摘するように、日中戦争を「皇民」として経験した台湾人と、「抗日戦」として経験した外省人知識人との間のずれは、当時の「祖国化」の流れの中でも、その後の歴史的展開の中でもすりあわせが困難だったわけであり、「祖国化」にとっての阻害要因を含めた総合的な評価が求められるであろう。

第三に、若林正丈氏の、台湾において中国は結局のところ理念化された虚像の域に留まらざる

をえなかったとする指摘は、第四章に論じられている大陸の知識人と台湾の知識人の相互のすれ違いの状況と重なるものと思われるが、こうした指摘を来台した大陸の左派知識人の活動との関係でどう考えるのか、ということは考えられてもいい問題ではなかったかと思われる。

しかしながらこうした問題は、本論文の成果を否定するようなものでない。丸川氏の今後の活動に期待したい。

以上のことから審査委員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2006年5月17日

受験者 丸川哲史

最終試験委員 松永正義 鵜飼哲 岩月純一

2006年4月26日、学位請求論文提出者丸川哲史氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文「台湾における二・二八事件前／後の文学空間——脱植民地期化と祖国化の交錯する磁場——」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、丸川哲史氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査委員一同は、丸川哲史氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。